林音ヨウの投げっぱなしタイトルシリーズ

林音ヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
林音ヨウの投げっぱなしタイトルシリーズ

【Ｎコード】
Ｎ０９０５Ｕ

【作者名】
林音ヨウ

【あらすじ】
ネタは出たけど自分では技術とモチベーションの都合で書けない、そんな妄想の産物を公開してみました。予告ＣＭみたいですが私は書きません。コレを読んだ誰かの創作意欲が刺激されればいいな～と思います。

リリカルマイナス負完全（前書き）

負完全のあの人がリリカルな世界に行ったら？と言う妄想です。

リリカルマイナス負完全

それは小さな願いでした。
何て事はない道端に転がる小石のように、誰もが気にも留めず、直ぐにでも忘れてしまうような些末なもの。
だけど、その願いは何処までも清らかで何よりも尊く輝いていました。

「あー何か突き抜けたモノが欲しいな～」

彼は一見すると酷く地味で様々なものが欠けていた。
悪でもなければ邪でもない。
さながら澄んだ川のようで濁ってさえおらず。
しかし、人間が持つ負の側面を全て余さず併せ持ったような人物だった。

負。

彼は生まれながらの敗北者で。
誰に対しても負けていて。
どんな存在よりも弱かった。

「その願い、叶えて上げようか？」

ある日ある時ある場所で。
偶然二人は巡り会った。

「君は誰？」
「僕は・・・・・・そうだね。

これからは『安心院なじむ』と名乗るとしよう。
だから親しみを込めて僕のことは安心院さんと呼びなさい」

負け犬のような彼の前に現れた彼女は、冗談みたいにあっさりと願いを叶え。
親しみ易くも胡散臭い笑顔を浮かべながら。
幾千幾万の想いが交わる世界へ突き落とす。

「『うわー』『綺麗な宝石だなぁ』『・・・・・・で』『君は誰？』」
「その石を渡してください」

青い石を求める少女との出会い。

「どうしてこんなことするの！？」
「『ちょっと待ってね』『今考えるから』」

白の少女の心を踏みにじり。

「『はーい』『プリシアさんの病気を「なかった」ことにしました
ー』『ついでにアリシア？ちゃんも生き返させてみました』」
『なっ！？』

一気に全てを台無しにする。
息をするように人を傷つけ。
人類抹殺などを至極真面目に考える。
誰からも負けていて。
何よりも弱くて。
四六時中不幸で。
何処までも後ろ向きで。

飛び切りの負幸を手にした彼は。
絶対的な負完全と成り果てた。
いずれ次元世界を最底辺へと突き落とす彼の名は。

球磨川　禊

過負荷な仲間を引き連れて。
今日も今日とて人々の心を完膚無きまでへし折り練り歩く。

悪魔のような男の前に。
魔法少女は！
次元管理局は！！
一体どうなってしまうのか！！？

「『さあ』『皆さんご一緒に』『オールフィクション！！』」

リリカルマイナス負完全（後書き）

誰かコレ書いてくれないかな～

諜報部大尉ハザま！（前書き）

ＢＬＡＺＢＬＵＥをネギま！にＩＮしてみた。
ぶっちゃけアンチもの。

諜報部大尉ハザま！

魔法。

それは定められた呪文を唱え、精霊に己の魔力を与え、対価として奇跡を得る人間が生み出した技術の一つ。

呪文を覚え、魔力を感知出来たなら誰もが比較的容易に扱えるもので、一部を除く関係者の間では広く親しまれている。

発動体と呼ばれる道具さえあれば後は己の身一つで様々な事が出来る魔法は、ライターを始めとした科学の利器と比べても使い勝手が良く非常に便利だ。

――――だが、その恩恵を受けている者は極僅か。人類全体の一握り程である。

何故、利便性の高い技術が普及していないのか？

理由は至って簡単にして単純。魔法を使う者、即ち魔法使いが知られることを畏れているからに他成らない。

かつて行われた魔女狩り。数多の無辜の民と魔法使い達が魔女の烙印を押され、正義の名の下に処刑された悲惨な出来事。その恐怖は歳月を隔てた現代でも根強く残っているのだ。

事実を隠蔽し、独自のコミュニティーに引き籠もり、遂には魔法世界と呼ばれる魔法使いのための世界まで作り上げた。

しかし、そこまでしても情報とは洩れてしまうもの。

隠そうとすれば隠そうとするほど証拠が残り、更には情報が飛び交う時代の煽りを受け、完全に秘匿することは叶わない。自分たちの領域でなければ尚更だ。

そこで彼らはある決断を下した。

世界各国の権力者や資産家と関係を持ち、協力を要請したのである。

これにより秘匿性は飛躍的に向上し、隠蔽工作も用意になった。

日常に生きる人々は魔法をオカルトかファンタジーの産物として位置付け、現実に存在するものとは知らずに生活を続けている。こうして魔法使い達の思惑通りで都合がいい状況が出来上がった。

だが、これを快く思わない存在がいた。

それは魔法使いが旧世界と蔑む地球――そこで情報工作に手を貸している権力者と資産家たちである。

協力関係にあるとは言っても力の無い彼らからすれば、凶器を突きつけられた脅迫同然の状態で強引に結ばされた関係である。表面上は穏やかでも腹の内では面白くない。

体の良い使いっぱしりにされ、ノホホンとしていられるような精神を持ち合わせている者はいなかった。

機会を見て彼らは一つの機関を組織する。

その組織の名は――――

「う～む」

麻帆良学園の理事長にして関東魔法協会の理事、近衛・近右衛門はその人外的な形をした頭部を抱え呻いていた。

その呻きの原因は机の上に置かれた一組の書類。

「何もネギくんが来るこの時期じゃなくてもよかろうに・・・・・・」

クリップで纏められたそれは、見出しにデカデカと『世界虚空情報統制機構　麻帆良学園査察のお知らせ』の文字が踊っていた。

英雄の息子、ネギ・スプリングフィールドが訪れる一ヶ月前。

麻帆良の地に一人の男――いや、蛇が舞い降りた。

「さすが学園都市と名高い麻帆良学園。無駄にだだっ広いですねぇ」

黒のスーツと帽子に身を包み胡散臭い笑みを浮かべた緑髪の彼は、ディズニーランドもかくやと言う町並みを眺め、少々毒の入った素直な感想を口にする。
しばし興味深げに周囲を見渡していると、一つの人影が近付いた。
「ようこそ麻帆良へ。案内役のタカミチ・T・高畑です。お迎えに上がりました」
「これはこれは、わざわざ有り難う御座います。
私、世界虚空情報統制機構・情報部のハザマです」

「認識阻害の結界があるからって好き放題やってくれっちゃいやがりますね。
これだから魔法使いって輩は・・・・・・」
ブツクサと苦言を零しながらハザマは手元の端末にデータを打ち込んで行く。
彼が今入力しているのは経過報告書。所謂レポートと言うものだ。
内容は勿論、麻帆良学園の魔法関係者の諸々についてなのだが・・・先の言葉から鑑みるにマイナス評価しか書かれていないように思える。

「オッサン、報告書は見たか？」
『ああ、酷い結果だな。呆れて物が言えんよ』
「んじゃ、分かってると思うが道具と暇な奴ら二～三人送ってくれや。ハクメンと猫又はもう戻ってんだろう？」
『勘がいいな。ついさっき帰還したところだ。
人手にしろ物資にしろ準備に二日は掛かる。それまで相手に気取られるなよ』
「はっ！俺がそんなヘマするとでも思ってんのか？オッサン」
『いや、思わんよ。貴様は態度は悪いが腕は確かだからな。

ではな。一応武運を祈って置いてやるぞ小僧』
「へいへい、お気遣い傷み入るぜ。
あのクソ吸血鬼によろしく言って置いてくれや」
Ｐｉっと通話を切り、さっと携帯を懐にしまう。
この瞬間より一つの終わりを告げるカウントダウンの針が動き始めた。

本来の歴史で存在しないものたち。
彼らが居ることで物語はどのように変貌して行くのだろうか・・・・・・

諜報部大尉ハザま！（後書き）

自分個人としては書きたいけど、まぁ無理かな

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0905u/

林音ヨウの投げっぱなしタイトルシリーズ

2011年6月15日00時11分発行